

『三十七の菩薩行』 終わりに

2022年6月から開始して1年10ヶ月、『三十七の菩薩行』をご一緒に読んできました。2週間に1回、みなさまと読み進めるのはとても良い時間でした。たくさんのことを学ばせていただきありがとうございました。

いくらか仏教の知識は増えてきたものの、やはり「空性」とか「法界」とか「法身」とかよく分かりません。それで今回は、野田先生がこれらの概念についてどのように考えておられたのか、『補正項』を調べてみました。

1) 存在論としての無常と縁起

最初に、私にとって衝撃的に感じたことからシェアします。

世界が無常であり縁起に依っている
ということは、世界の実相であって
単なるものの見方ではない

存在論というのは「世界はどのようなものであるか？」という問いへの答え、認識論というのは「世界をどのように知るか？」という問いへの答えだ。

2011年11月22日「縁起と空(2)」

石飛道子先生が『ブッダ論理学五つの難問』(講談社選書メチエ)の中に、「ブッダの哲学は、無から有へと転変するという存在論を根幹に置くのである」(p.73)と、なにげなく書いておられるが、これを読んだとき、私は椅子から転がり落ちそうになるほど感動した。それまでは、《無常》だの《縁起》だのというのは認識論であり、「ひとつのものの見方」だと思っていた。そうではなくて、それこそがこの世界の実相なのだということを、これを読んだときに知った。経典のどこにでも書いてあって、しかも読んで知りえないことを、なかば一般向けの草書で知るといふこともあるのだ。縁だね。

2009年4月27日「事実とは何か」

私たちは「無常」や「縁起」を「そう認識しているだけで実際はどうか分からない」となんとなく考えて暮らしています。でも世界は誰が何と言おうと確かに「無常」で「縁起」に依って生滅しています。だからよく考えれば「実相」だとわかります。これこそが仏教の基本前提かな？と思いました。このような存在論(世界に関する深い理解)の上に、六道輪廻とか有暇具足とか六波羅蜜とか空性の理解とかの認識論があるのかもしれないと思いました。

2) 瞑想の目的

次に、瞑想の目的について書かれた補正項で、私が感動した記事を引用します。2013年、最初のシンガポール旅行の後に書かれたものです。

今回のシンガポール訪問は、かなりショッキングだった。(中略) 仏教は学んだけれど、それと瞑想とを積極的に結びつけて考えることをしてこなかった。チベット仏教に改宗してからも、関心があるのは瞑想法であって、宗教としてのチベット仏教ではなかった。

ところが、今回は、宗教としてのチベット仏教にはじめて直面した。それは、一方では加持祈祷を期待する華僑の大胆那衆を見たことでもあるし、一方では密教瞑想を宗教から切り離すと地獄にまっしぐらだということ、ある実感をもって学んだことだ。自分自身の救済のために瞑想をしてはいけない。そんなことをすると我執がより強くなり、より自分をも周囲の人々をも苦しめる。瞑想は、一切衆生を救済するためにおこなう。それは、出家行者でなくても、在家信者でもそうでなければならない。顕教の瞑想は宗教的な認識が進むにつれて深まっていくので安全なのだが、密教の瞑想は、いきなり結果を作り出す。もしそのときに我執があれば、思い上がって自分は悟ったと思い、あるいはそこまではいなくても人々よりすぐれていると思って、とってもイヤな人間になってしまう。そして、多くの人は社会の常識を踏み外した生活をして「俗人にはわからんのだ」などうそぶいて、恥じることがない。和尚の弟子たちでそういう風になってしまった人をたくさん見た。それが起こらないためには、まず宗教を学ばなければならないし、瞑想は宗教を学ぶための方便(手段)であって、目的ではないのだということをはっきりと理解しておかなければならない。

2013年9月3日「シンガポール(8)」

このときの経験から、仏教を学ぶ「学者」だった先生が、仏教を実践する「修行者」になったように私には思われます。

瞑想は、宗教を学ぶための手段
瞑想の究極的な目的は、一切衆生を救うこと

もちろん自分の心を落ち着かせる、自分自身が平和な心になることは、まず必要なことだと思います。それがなければ人を助けようという余裕も生まれません。でも最終的な目標は自分の寂靜ではないのだと、ここで先生ははっきり言葉にされました。これも、忘れてはならないとても大事なポイントだと思いました。

3) どうやって心を飼い慣らすか

続けて翌年、2014年5月頃には「心を飼い慣らす」というシリーズが書かれました。

何のために心を飼い慣らすかというと、幸福になるためだ。自分が幸福になるためには、周囲の人々を幸福にしなければならない。もし自分ひとりだけが幸福になる道があれば、心を飼い慣らす必要はそんなにないんだけど、残念ながらそういう道はない。周囲にいる人々を幸福にするのが、自分が幸福になるためのただひとつの道だ。

2014年5月1日「心を飼い慣らす(2)」

- 第一段階：心をしっかり飼い慣らして、相手がどんな反応をしてもなお「いい人」でおれるようになる。
- 第二段階：いつでも自分のしていることに気がついていて、悪業が起ころうになる瞬間に気がつけるようになる。
- 第三段階：間違った見解(=我執)を捨てて正しい見解(=空)を学ぶ。
- 第四段階：宇宙にはただひとつの生命があるということを信じる。

第一段階は、相手がどんな反応をしてもなお「いい人」でおれるように心を飼い慣らすこと。『三十七の菩薩行』に、関連した偈がたくさんありました。

誰かが欲から私の財宝の すべてを奪い奪わせたとしても
体も財も三世の善業も 廻向するのが仏子菩薩行 (12)

私にわずかの罪もないときに 誰かが頭を斬ってしまおうが
悲心によって相手のその罪を 私にいただく仏子菩薩行 (13)

ある人私の悪言さまざまを 三千世界にあまねく言いふらす
慈心によって幾度もその人の 徳を言うのが仏子菩薩行 (14)

多くの人の集まるその前で わが間違いをあばいて侮辱する
その人もまた師なりと心得て ふしおがむのが仏子菩薩行 (15)

子どものようにいとしみ育てたが 私を敵だとみなすその人を
病気にかかった子どもの母のごと よりいつくしむ仏子菩薩行 (16)

私と同じかもしくは劣る人 慢心のため私をさげすむも
ラマのごとくにひれふし尊敬し 頭上にいただく仏子菩薩行 (17)

第二段階は、心を「いまここ」に留めておいて、日常生活の中で悪業が起りそうになる瞬間に気がつけるようになること。

煩惱慣れば対治も阻止できぬ 念知の人は対治の剣持ちて
執着煩惱生まれいでたれば ただちにつぶす仏子菩薩行 (35)

つまるところはいつでもどこにても いまこのときに心はいかなるか
尋ねていつでも念知を身に備え 利他成就する仏子菩薩行 (36)

第三段階は、間違った見解 (=我執) を捨てて正しい見解 (=空) を学ぶこと。

「我」というのは、他者と区別されるものとしての自分のことだ。しかし、実は宇宙にはただひとつの生命しかなくて、それをわれわれは分有している。それなのに、「自分は自分、他者は他者」と、まったく別のものであり、さらには他と対立するものであると誤解している。たとえて言うと、ひとつの体の右手と左手が対立しあっているようなものだ。ほんとうは大きな全体の一部なのに、自分自身が独立した全体だと思い込んでいる。(中略) さらに自分は、我所(自分のもの)を囲い込んで、「これは自分のもの、他者のものではない」と思い込む。実際のところは、外側にある家族や友人や財産などはもちろんのこと、自分自身の身体や生命でさえ「自分のもの」ではない。たとえていえば、一緒にプールに入っていて、「この水は自分の水だ」と主張しているようなものだ。もちろん、世間的には、自分の財産もあれば自分の生命もあるわけだが、それは世間の慣行でそう言うにすぎず、究極的には「自分のもの」などというものは何もない。このように、家族や友人や財産はもちろん、身体も生命も何もかも含めて、自他の区別を否定してしまい、すべてを手放すことを「空」という。

貪欲や瞋恚が起こるのは、空を理解していないからだ。空を理解していない状態を邪見という。それが翻って、「ああ、空なんだ」とわかると正見という。ここまでが話の第三段階。

2014年5月2日「心を飼い慣らす(3)」

ガルチェン・リンポチェも、私たちは我執があるために目が曇って真実が見えなくなっている、本当は同じひとつの大海の水なのに固い氷になってしまっている、と繰り返しおっしゃっています。宇宙にただひとつの生命しかなく、みんながそれを分け持っているのだと心から信じることができたなら素敵だなと思います。

顕現するもの自分の心なり 心性もとより戯論を離れたり
そを知り能取と所取の相たちを 心に造らぬ仏子菩薩行 (22)

最後が第四段階。宇宙にはただひとつの生命があるということを信じる。

ここから話は神がかってくるのだが、チベット仏教のマハムドラー思想では、宇宙にはただひとつの生命があって、それが仏だという。あるいは法身といてもいいし、法界といてもいいし、光明といてもいいし、空性といてもいい。

2014年5月2日「心を飼い慣らす(3)」

世界はただそのように「在る」。これを「大我」と言おうと「仏」と言おうと、ただそのように「在る」だけなのだけれど、けれど「無い」と二項対立する意味での「在る」という意味づけもまたないので、ただひたすらに「在る」だけだ。

2014年5月23日「慈悲と空性(5)」

《存在》は唯一のものであるから、どんな名前でも呼ぶことができる。そこでそれを仮に《仏》という名で呼ぼうというのが、チベット仏教カギユ派のアイデアだ。この《仏》は、キリスト教の「神」とはまったく違っている。なぜなら、キリスト教の神は世界と対立した存在であり、実は絶対者ではない。しかし《仏》は世界そのものであり、《仏》の他になにか別の存在があるわけではない。

インド哲学の各流派は、このような《存在》を想定することについて合意している。もし合意しなければ「世界は存在しない」と主張する虚無論に陥ってしまい、それはいくらなんでもあんまりだからだ。その中でカギユ派はそれを《仏》あるいは《法身仏》と呼ぶのだけれど、これはカギユ派の世俗諦だ。ゲルク派は《空性》のまま置いておくようだし、禅宗はしばしば《無》と呼ぶようだ。いずれにせよ、「名づけられないそれ」に無理矢理名前をつけているので、対立のある言葉で語られる「神」などとはまったく違った「あるもの」だ。

2016年1月22日「三輪清浄について(5)」

ただ「在る」《存在》を
仏 法身仏 空性 無 如来蔵 などと
仮に名づける

抽象的な概念はよくわかりませんが、でも世界に何かひとつの《存在》があって、良くも悪くもその流れに乗って自分は生かされているのだというふうには、日々感じています。その《存在》がもし仏さまであるなら、とてもありがたいことだし、安心できる考え方だと思いました。

4) 如来蔵思想

最後に如来蔵思想について少しお話しします。この世界にただひとつある《存在》のことを「如来蔵」と呼ぶこともあり、カギユ派では祖師のガムポパ大師が、『解脱の宝飾』第一章「因の善逝蔵」で詳しく説明しています。

ところが、実は如来蔵思想は、日本では少し肩身の狭い思想なのです。1989年、松本史郎という若い仏教学者が『縁起と空：如来蔵思想批判』という本を出して、当時如来蔵思想の第一人者だった高崎直道氏を痛烈に批判しました。当時その界限ではベストセラーだったようです。

野田先生もこの本を読んで以来、ずっと如来蔵思想を批判していました。それが2013年にシンガポールでガルチェン・リンポチェのご法話を聴いて、意見が変わりました。

ガルチェン・リンポチェは、では、どうおっしゃるかということ、あっさり「仏」だとおっしゃる。

心性の精髓は空性であり、虚空のように存在しますが、これが法身です。

昨年夏にシンガポールで、この話を聞いてぶっ飛んでしまった。いやあ、そうだよ、ね、「仏」って呼ぶのはいい考えだ。

2014年5月22日「慈悲と空性（4）」

ガルチェン・リンポチェは、いきなり、

ブッダはかつておっしゃいました。「仏は衆生の心の中にかならず存在する。仏は一切衆生の心の中に存在するのであるが、しかし衆生の心は一時的に我執と煩惱によって邪魔されており、我執と煩惱はすべて苦の本質を帯びているのだ」と。

(『恒河大手印之智焰実論』, p.14)

とおっしゃるが、これを「仏性思想」あるいは「如来蔵思想」という。1990年頃、松本史郎先生や袴谷憲昭先生がこの思想を批判された。批判のもっとも中核部分は、永遠の仏性（内なるブッダ）が原因になって諸法（この世で体験するすべての現象）が起こるのであれば、そこには真の意味での縁起がないではないか、ということであったと理解している。チベットでも、おおむかに、ツォンカバ尊者がこれと同じ趣旨でこの思想を批判された。しかしカギユ派は、あらゆる批判にもめげず、現在も如来蔵思想の真ただ中にいる。松本先生の鋭い議論にカブれて如来蔵思想に反感を持っていた私が、カギユ派のリンポチェの弟子になったのは、きっと過去生の因縁であろうから、いまは素直に如来蔵思想の勉強をしている。

2014年5月19日「慈悲と空性」

如来蔵思想については、このように野田先生が途中で意見を変節されたこともあり、私自身どう考えればよいかあやふやなままでした。

しかし、どんな衆生でもいつかは仏になる種を持っている、仏になる可能性がある、と考えると、勇気づけられるし、仏さまを近くに感じられるように思います。また、自分も他人も本質は同じなのだ考えると、人に優しくなれるように思います。縁あってカギユ派のリンポチェの弟子になったのですから、ただひとつの存在を仏さまと思い、その仏さまのありがたさのいくらかをそれぞれが分け持っているのだと考えれば（つまりひとつの見方としてこの立場を選べば）よいのだ、と納得しました。

一切は「無常」で「縁起」に依っている（存在論）
「衆生を救う」という大乘仏教の目的からみて
如来蔵思想は有効な方便と思われる（認識論）